

# 引っ込み思案行動に対する幼児の認知

## — 仮想場面による検討 —

藤岡 久美子<sup>1)</sup> 渡辺 梢<sup>2)</sup>

本研究は引っ込み思案行動に対する幼児の受容度について、引っ込み思案行動の場面および種類の点で検討した。90名の幼児を対象に、七つの場面における3種類の引っ込み思案行動の合計21個の仮想場面を提示し、登場人物への受容度を尋ねた。七つの場面は仲間入り・あいさつ・会話・要求に対する応答2場面・援助2場面であり、引っ込み思案行動は、働きかけに対して消極的に反応するもの・躊躇するもの・無反応なものであった。消極的な反応に対する幼児の受容度は、すべての場面において高かったものの、年齢が上がるにつれて受容度は減少する傾向が示された。躊躇や無反応に対する受容度は、場面や年齢および性により異なっていた。要求に対する応答場面や援助場面で示される躊躇や無反応は、受容されにくく、また、年中より年長、男児より女児の受容度が低い場合があった。これらの結果から、自分から集団参加しない他者に対する幼児の評価は、利害のないやりとりの場面での消極的反応に対しては否定的ではないが、明確な応答や自発的な行動が期待される場面においてそれを示さない場合に否定的になることが示唆された。

キーワード：引っ込み思案 幼児 対人認知

### 問題と目的

幼児期に他者の意図・欲求・感情を推測したり（東山, 2007）、他者の性格特性に基づいて行動を予測する力が発達する（清水, 2000；林, 2004）。清水（2000）によれば、性格特性が特定の場面をこえて一貫した行動の原因になることは5歳から理解され始め、6歳でそれが確実になる。すなわち、他者の行動に対して、一時的で場面依存的なとらえ方から、内的特性に関連づけた解釈、さらにはある場面での行動から他の場面での行動の予測ができるようになるという。また、5歳児が、他者の行動の観察に基づいて自発的に内的特性の把握や行動の予測を行うことを示す研究もある（松永, 2002）。

このような子どもの他児の行動への解釈や知覚は、その子を受け入れるか拒否するか判断につながる（Hymel, 1986）。したがって、対人的適応のリスクとなりうる仲間の行動を、子どもがどのように認知するのかを明らかにすることは、引っ込み思案時への介入や援助を考えるうえでも重要である。そのような観

点に立った研究は、仮想場面を用いて、攻撃性と引っ込み思案さに関する幼児や児童の認知や態度、好悪の評価などを検討してきた（Goossens, Bokhorst, Bruinsma, & van Boxtel, 2002；Giles & Heyman, 2004；Younger & Piccini, 1989）。

Rubin & Coplan（2004）によれば、攻撃性は低年齢の頃から一貫して仲間から拒否されるのに対し、引っ込み思案行動は年齢が上がるにしたがって、徐々に仲間からの拒否につながっていくことが示されている。本邦でも、佐藤・佐藤・高山（1989）が3年生と6年生の児童を対象に引っ込み思案行動への受容度の評定を検討したところ、6年生は3年生よりも低い受容度を示した。また、集団不参加の状態のうち、引っ込み思案によるものと仲間からの拒否による孤立とを、幼児は区別し、異なる評価を与えていることも示されている（Younger & Daniels, 1992）。

ところで、これまでの研究では、引っ込み思案は“シャイで仲間との相互作用に消極的”と、集団不参加と感情特性の両方から定義されていた（Pekarik, Prinz, Liebert, Weintraub, & Neale, 1976；Rubin, Chen, & Hymel, 1993）。しかし、近年では、関わりたいがシャイさにより一人である子ども、好んで一人で

1) 山形大学大学院教育実践研究科

2) 発達臨床教育コース 平成14年度卒業生

いる子どもなど、一人で遊ぶという選択の背景にあるさまざまな動機プロセスを含んだ広いとらえ方によって引っ込み思案 (social withdrawal) が研究されている (Rubin & Coplan, 2004; 千葉・藤岡, 2009)。

Coplan, Girardi, Findlay, & Frohlick (2007) は、6歳児を対象に引っ込み思案のサブカテゴリーとしての“シャイ”と“非社会性”に対する認知と解釈を、仮想場面を用いて検討した。彼らはシャイな子どもの記述文として「この子は、他の子に話しかけるのがこわいと感じている (be afraid to talk)。友達が遊んでいるとき、その様子を見ています」、非社会的な子どもの記述文として「この子は一人で遊ぶのが好きな子です (likes to play on his own)。他の子が遊んでいるとき、一人で遊んでいます」と提示した。この架空の子どもに関して、意図的にその行動をしているのか、関わろうという動機はあるのかといった点の解釈を求め、また、その子への好意や同情などを尋ねた。その結果、どの質問への回答についても“シャイ”と“非社会性”の間に有意差が示され、6歳児は“シャイ”を“非社会性”よりも肯定的にとらえていた。Coplan et al. (2007) は、幼児は“シャイ”と“非社会性”を的確に区別できると結論づけている。しかし、この解釈には以下の点で疑問が残されている。

実際の相互作用であれば、他者の行動観察からの内的特性の推測、観察と推測に基づいた他者への評価と態度形成が行われると考えられるが、上述の手続きでは、集団不参加の形態 (他者の遊びを見ている、一人で遊んでいる) と背景となる内面的特性 (話すのが怖い、一人遊びが好き) に関する情報を組み合わせて与えた上で、その登場人物に対する評価を求めている。それゆえ、遊びを傍観している、あるいは一人で遊んでいるという他者の行動そのものに対して幼児が異なる評価を行っていたかどうかは不明である。引っ込み思案が年齢が上がるにつれて受け入れられにくくなる背景について明らかにするためには、引っ込み思案的な行動そのものに対する幼児の評価を詳細に検討する必要がある。

また、先行研究では、遊びへの仲間入りの場面の行動記述を提示し、引っ込み思案児や攻撃児への受容度を検討してきた (Coplan et al., 2007; 片山, 1991)。しかし、引っ込み思案行動は遊びへの仲間入り場面だけの問題ではない。園での仲間との多様な相互作用の状況において引っ込み思案行動は示される。働きかけや応答の不明瞭さや少なさが、どの程度相手からの否定的な評価につながるかどうかは、相互作用の状況に

よっても異なると考えられる。

以上の問題意識から、本研究では、感情や好みなど内面情報は与えず、多様な場面での引っ込み思案的な行動記述のバリエーションを示し、それらに対する受容度の差の有無から、幼児の引っ込み思案行動のとらえ方を検討する。

引っ込み思案行動が示される場面は、佐藤・佐藤・相川・高山 (1990) が引っ込み思案児と非引っ込み思案児の間の有意差を報告した社会的スキル尺度の項目<sup>1</sup>を参考に、あいさつ・仲間入り・会話・要求への応答・援助 (他者の困窮) を取り上げることとする。それらの場面における引っ込み思案行動の記述として、他者から働きかけられた時や自らの働きかけが期待される時に、消極的ではあっても何らかの反応を示すもの・それらの状況で反応を躊躇するもの・無反応なもの<sup>2</sup>の3種類を作成することとする。

児童期の不適応に関する研究では、女兒よりも男児において、引っ込み思案傾向は不適応の指標と結びついていることが示されている (Rubin & Coplan, 2004)。しかし、引っ込み思案行動への受容を仮想場面を用いて尋ねた研究では、性差に関して一貫した報告がなされていない。Coplan et al. (2007) では、彼らの予想に反して性差が示されなかった。一方で、佐藤ら (1989) では、小学校6年生において女兒の方が引っ込み思案に対して否定的であった。そこで、本研究では性差についても検討する。また、引っ込み思案傾向のある友人と関わった経験によって引っ込み思案行動への評価が異なるかという点についても検討する。

## 方法

### 対象児

山形県内の幼稚園および保育園の年中児44名 (男児19名, 女児25名) および年長児46名 (男児14名, 女児32名) であった。平均年齢は年中4歳6か月, 年長5歳6か月であった。

<sup>1</sup> あいさつをする, グループで仲良く遊ぶことができる, 困っている友達がいても助けてあげない, 友達とあまり話をしない, 遊んでいる友達の中に入ろうとしてもなかなか入れない, 友達が誘っても一緒に遊ばない, 「仲間に入れて」と頼むことがない, 友達にあまり話しかけない, 友達の遊びをじっと見ていることが多い

## 材 料

あいさつ・仲間入り・会話・要求への応答2場面・援助2場面の七つの場面を設定した。いずれの場面も、登場人物は対象児および同性の架空のクラスメートであり、対象児が架空のクラスメートに働きかける、あるいは架空のクラスメートの前で困窮状況に陥るところまでを導入部分とした。各場面とも架空のクラスメートの反応として3種類の異なる結末部分が用意され、合計21の物語が作成された (Table 1)。3種類の結末は、対象児の行動に対して架空のクラスメートが消極的ながら一応の反応を示すもの、躊躇するもの、無視・無反応なものであった。物語はどれも導入部分は2枚、結末部分は1枚の紙芝居で提示された。紙芝居は男児用と女児用がそれぞれ作成された。架空のクラスメートへの受容度の測定のために「いっぱい遊びたい」「少し遊びたい」「遊んでもいいし遊ばなくてもいい」「あまり遊びたくない」「全然遊びたくない」を表した表情図カードが用意された。

## 手続き

面接は2回に分けて行われた。1回目は3場面、2回目は4場面を提示した。7場面の提示順は固定し、結末3種類の提示順序はカウンターバランスをとった。物語の提示に先立ち、紙芝居の登場人物が対象児本人と架空のクラスメートであることを絵を指さしながら説明した。架空のクラスメートの名前には、対象児の園にはいない名前を適宜用いた。紙芝居で物語を提示した後、「こんなお友達が同じクラスにいたら、【対象児】ちゃんはどうくらい遊びたいと思うかな。」と質問し、表情図を用いて「いっぱい遊びたい」「少し遊びたい」「遊んでもいいし遊ばなくてもいい」「あまり遊びたくない」「全然遊びたくない」から選んでもらった。その後、「【対象児】ちゃんのお友達に、この子みたいに……する子はいますか」と、紙芝居の登場人物のような友達が実際に周りにいるかどうかを質問した。

Table 1 仮想場面の引っ込み思案行動の記述 (女児版)

場面	導入部	引っ込み思案レベルごとの展開
仲間入り	【対象児の名前】ちゃんがおままごとをしていると、<○○/△△/□□>ちゃんが見ていました。【 】ちゃんが「一緒にやろう」と誘うと……	1. ○○ちゃんはおままごととに混ざりました。 2. △△ちゃんはおままごとと混ざっていませんでした。 3. □□ちゃんは何も言わないでどこかにいってしまいました。
会話	<○○/△△/□□>ちゃんは自分からはあまりお友達に話しかけません。【 】ちゃんが話しかけると……	1. ○○ちゃんはお話に混ざりました。 2. △△ちゃんはお話に混ざっていませんでした。 3. □□ちゃんは何も言わないでどこかにいってしまいました。
あいさつ	<○○/△△/□□>ちゃんは朝幼稚園で会っても自分からは「おはよう」と言いません。【 】ちゃんが「おはよう」と言うと……	1. ○○ちゃんは「おはよう」と言いました。 2. △△ちゃんはおはようと言いませんでした。 3. □□ちゃんは何も言わないでどこかにいってしまいました。
要求に対する応答	<○○/△△/□□>ちゃんが砂場でお山を作っています。【 】ちゃんが「スコップ貸して」と言うと……	1. ○○ちゃんは何も言わないでスコップをかきました。 2. △△ちゃんは何も言わないでスコップを貸しました。 3. □□ちゃんは何も言わないでスコップを持ってどこかにいってしまいました。
要求に対する応答 <sup>2</sup>	<○○/△△/□□>がブランコに乗っています。【 】ちゃんや他のお友達が順番を待っていて、「ブランコに乗せて」と言いました。	1. すると、○○ちゃんは何も言わないでブランコを貸しました。 2. すると、△△ちゃんは何も言わないで順番を待っていました。 3. すると、□□ちゃんはそのままだブランコに乗っていました。
援助	【 】ちゃんが転んで泣いてしまいました。	1. ○○ちゃんは「大丈夫?」とは言わないけれど、先生を呼んできてくれました。 2. △△ちゃんは近くにいたけれど、見ていただけでした。 3. □□ちゃんは近くにいたけれど、そのまま遊んでいました。
援助2	給食係の【 】ちゃんが牛乳を運んでいる時に転んでしまいました。ビンが割れて牛乳がこぼれています。	1. ○○ちゃんはお掃除は手伝ってくれないけれど、先生を呼んできてくれました。 2. △△ちゃんは近くにいたけれど、見ていただけでした。 3. □□ちゃんは近くにいたけれど、そのまま遊んでいました。

## 得点化

受容度は、「いっぱい遊びたい」を5点、「少し遊びたい」を4点、「どちらでもいい」を3点、「あまり遊びたくない」を2点、「全然遊びたくない」を1点とした。

## 結果

年齢・性別・反応・場面による引っ込み思案への受容度の差異

各場面の年齢、性別、引っ込み思案反応（反応あり・躊躇・無反応）ごとの受容度の平均およびSDをTable 2に示した。Table 2に示されるように、引っ込み思案反応のうち、反応ありに対する受容度は、一部を除いて4点以上であった。年中男児では、躊躇や無反応に対する受容度もほとんどが3点以上であった。対照的に、年長女児では躊躇や無反応に対する受容度はほとんどが3点未満であった。引っ込み思案行動に対する受容度の年齢差、性差、引っ込み思案反応による差、場面差およびそれらの交互作用を明らかにするため、以下の分析では、まず、7場面ごとに年齢×性別×引っ込み思案反応の分散分析を行う。次に、七つの場面を、関わり（仲間入り・会話・あいさつ）、要求に対する応答、援助の3種類にまとめ、引っ込み思案反応ごとに年齢×性×場面の分散分析を行う。

場面ごとの年齢×性別×引っ込み思案反応の分散分析  
各場面の受容度について年齢(2)×性別(2)×引っ込み

思案反応(3)の分散分析を行った。

“仲間入り”、“あいさつ”、“要求への応答2”、“会話”、“援助2”の5場面においては、引っ込み思案反応の主効果が有意であった（順に、 $F(2, 172) = 29.06$ ;  $49.98$ ;  $69.03$ ;  $12.43$ ;  $49.65$ ,  $p < .01$ ）。LSD法による多重比較によれば、“仲間入り”、“会話”、“援助2”では引っ込み思案反応3種類のすべての間に有意差がみられ、いずれも、反応あり、躊躇、無反応の順に受容度が高かった（順に $MSe = 1.31$ ;  $1.31$ ;  $1.44$ ,  $p < .05$ ）。“あいさつ”と“要求への応答2”では、反応ありへの受容度が他の2つよりも高かった（ $MSe = 1.30$ ;  $1.60$ ,  $p < .05$ ）。

“会話”、“あいさつ”、“要求への応答2”においては性の主効果も有意傾向であり、いずれも男児の方が女児よりも高い受容度を示した（ $F(1, 86) = 3.31$ ;  $3.97$ ,  $p < .10$ ）。

また、“あいさつ”、“援助2”においては年齢の主効果も有意であり、年中児の方が受容度が高かった（ $F(1, 86) = 4.41$ ;  $4.81$ ,  $p < .05$ ）。

“援助1”において、性と引っ込み思案反応の交互作用が有意であった（ $F(2, 172) = 3.59$ ,  $p < .05$ ）。単純主効果の検定の結果、躊躇反応と無反応に対して男児は女児よりも受容していた（ $F(1, 86) = 2.95$ ,  $p < .10$ ;  $F(1, 86) = 4.33$ ,  $p < .05$ ）。また、男児においても女児においても引っ込み思案反応の単純主効果が有意で（ $F(2, 172) = 6.12$ ;  $26.56$ ,  $p < .01$ ）、LSD法による多重比較の結果、反応ありは躊躇および無反応よ

Table 2 仮想的引っ込み思案児への受容度の年齢・性別・反応ごとの平均 (SD)

引っ込み思案反応		年中						年長						
		男児(N=19)			女児(N=25)			男児(N=14)			女児(N=32)			
		反応あり	躊躇	無反応	反応あり	躊躇	無反応	反応あり	躊躇	無反応	反応あり	躊躇	無反応	
仲間入り	<i>M</i>	4.95	3.84	3.42	4.56	3.92	3.28	4.71	3.57	3.50	4.41	3.53	3.13	反応あり>躊躇>無反応
	<i>SD</i>	(0.22)	(1.27)	(1.53)	(0.90)	(1.26)	(1.64)	(0.59)	(1.24)	(1.59)	(1.00)	(1.25)	(1.39)	
会話	<i>M</i>	4.95	3.53	3.47	4.52	3.80	2.80	4.71	3.64	3.21	4.72	2.97	2.47	反応あり>躊躇>無反応 (男児>女児)
	<i>SD</i>	(0.22)	(1.39)	(1.46)	(1.06)	(1.53)	(1.60)	(0.59)	(1.44)	(1.42)	(0.72)	(1.36)	(1.39)	
あいさつ	<i>M</i>	4.79	3.84	3.11	4.72	3.04	2.84	4.79	2.86	2.79	4.53	2.47	2.34	反応あり>躊躇、無反応 年中>年長 (男児>女児)
	<i>SD</i>	(0.69)	(1.42)	(1.65)	(0.66)	(1.66)	(1.54)	(0.41)	(1.25)	(1.52)	(0.93)	(1.27)	(1.45)	
要求への応答1	<i>M</i>	4.16	3.42	3.68	4.36	3.36	2.60	3.93	3.86	2.50	4.00	2.78	2.22	
	<i>SD</i>	(1.27)	(1.57)	(1.26)	(1.09)	(1.26)	(1.55)	(1.03)	(1.41)	(1.45)	(1.27)	(1.45)	(1.47)	
要求への応答2	<i>M</i>	4.32	3.68	3.47	3.72	3.04	3.72	3.86	3.29	2.71	3.59	2.84	2.72	反応あり>躊躇、無反応 (男児>女児)
	<i>SD</i>	(0.98)	(1.38)	(1.67)	(1.56)	(1.51)	(1.43)	(1.46)	(1.28)	(1.48)	(1.41)	(1.33)	(1.42)	
援助1	<i>M</i>	4.37	3.42	3.58	4.60	3.00	3.00	3.93	3.29	2.93	4.28	2.56	2.16	無反応：男児>女児 反応あり>躊躇、無反応
	<i>SD</i>	(1.13)	(1.57)	(1.63)	(1.02)	(1.55)	(1.20)	(1.44)	(1.67)	(1.75)	(1.26)	(1.25)	(1.33)	
援助2	<i>M</i>	4.63	3.21	2.89	4.40	3.32	2.76	4.14	3.29	2.14	4.16	2.34	2.28	反応あり>躊躇>無反応 年中>年長
	<i>SD</i>	(0.81)	(1.51)	(1.62)	(0.94)	(1.62)	(1.53)	(1.12)	(1.67)	(1.36)	(1.30)	(1.24)	(1.37)	



りも受容度が高かった ( $MSe=1.61; 1.61, p < .05$ )。

“要求への応答1”では、年齢×性別×引っ込み思案反応の二次の交互作用が有意傾向であった ( $F(2, 172) = 2.92, p < .10$ )。年齢ごとに性×引っ込み思案反応の分散分析を行ったところ、年長では引っ込み思案反応の主効果が有意であり、反応あり、躊躇、無反応の順で受容度が高く、すべての間に有意差が示された ( $F(2, 88) = 15.73, p < .01; MSe=1.62, p < .05$ )。年中では、性×引っ込み思案反応の交互作用が有意であり ( $F(2, 84) = 3.46, p < .05$ )、男児の方が女児よりも無反応への受容度が高かった ( $F(1, 42) = 5.22, p < .05$ )。女児では年長と同じように、反応あり、躊躇、無反応の順で受容度が高く、すべての間に有意差が示された ( $F(2, 84) = 13.15, p < .01, MSe=1.28, p < .05$ )。次に、性別ごとに年齢×引っ込み思案反応の分散分析をした結果、女児において引っ込み思案反応の主効果が有意であり、無反応への受容度が他の2つの反応よりも低かった ( $F(2, 110) = 31.69, p < .01, MSe=1.42, p < .05$ )。男児では交互作用が有意であり ( $F(2, 62) = 3.56, p < .05$ )、年中の方が無反応への受容度が高いこと ( $F(1, 31) = 5.88, p < .05$ )、また、年長では無反応への受容度が他の二つの反応に対するよりも低いことが示された ( $F(2, 62) = 6.95, p < .01; MSe=1.50, p < .05$ )。すなわち、“応答への要求1”では、年中男児はどの引っ込み思案反応に対しても同じように受容しているが、他の群は引っ込み思案反応によって受容度の差を示した。

引っ込み思案反応ごとの年齢×性別×場面の分散分析

平均とSDはTable 3に示した。

反応ありにおいて、年齢の主効果が有意傾向であり ( $F(1, 86) = 3.10, p < .10$ )、年中の方が受容度が高かった。また、状況の主効果は有意であり ( $F(2, 172)$

$= 16.81, p < .01$ )、LSD法による多重比較の結果、関わり場面、援助場面、要求に対する応答場面の順に引っ込み思案反応への受容度が高かった ( $MSe=0.58, p < .05$ )。

躊躇において、性の主効果が有意傾向であり、男児の方が女児よりも受容度が高かった ( $F(1, 86) = 3.73, p < .10$ )。また、場面の主効果も有意であり ( $F(2, 172) = 3.43, p < .01$ )、LSD法による多重比較の結果、関わり場面における躊躇反応に対しては、援助場面における躊躇反応に対するよりも受容度が高かった ( $MSe=0.73, p < .05$ )。

無反応では、年齢×性×場面の交互作用が有意傾向であった ( $F(2, 172) = 2.52, p < .10$ )。年中および年長それぞれにおける性×場面の分散分析を行なった結果、年中において、男児の方が女児よりも無反応への受容度が高かった ( $F(1, 42) = 2.88, p < .10$ )。年長においては、場面の主効果が有意であり ( $F(2, 88) = 5.19, p < .01$ )、LSD法による多重比較の結果、関わり場面では他の二つの場面におけるよりも無反応への受容度が高かった ( $MSe=0.57, p < .05$ )。次に、性別ごとに年齢×場面の分散分析を行なった結果、男児において、年齢×場面の交互作用が有意傾向であり ( $F(2, 62) = 3.00, p < .10$ )、要求に対する応答場面で年中の方が無反応への受容度が高かった ( $F(1, 31) = 4.24, p < .05$ )。また、年長では関わり場面が他の二つの場面よりも受容度が高かった ( $F(2, 62) = 4.27, p < .05; MSe=0.58, p < .05$ )。女児においては、無反応への受容度は全般的に低く、場面や年齢による受容度の差は見られなかった。

引っ込み思案児との関わりの有無による受容度の差異

引っ込み思案行動を示す仲間と実際に関わりを持った経験のある幼児とない幼児で、引っ込み思案行動の捉え方に違いがあるのかを検討するために、21個の

Table 3 各引っ込み思案反応に対する年齢、性別、状況ごとの受容度の平均 (SD)

		年中						年長						
		男児(N=19)			女児(N=25)			男児(N=14)			女児(N=32)			
		関わり	要求への応答	援助	関わり	要求への応答	援助	関わり	要求への応答	援助	関わり	要求への応答	援助	
反応あり	<i>M</i>	4.90	4.24	4.50	4.57	4.06	4.50	4.74	3.89	4.04	4.57	3.83	4.23	関わり>援助>要求への応答
	<i>SD</i>	(0.23)	(0.92)	(0.87)	(0.57)	(0.98)	(0.75)	(0.46)	(1.07)	(1.13)	(0.78)	(1.01)	(1.04)	(年中>年長)
躊躇	<i>M</i>	3.74	3.55	3.32	3.57	3.16	3.14	3.36	3.57	3.29	2.99	2.83	2.53	関わり>援助
	<i>SD</i>	(1.26)	(1.36)	(1.40)	(1.23)	(1.13)	(1.40)	(1.15)	(1.12)	(1.42)	(0.96)	(1.20)	(0.97)	(男児>女児)
無反応	<i>M</i>	3.33	3.58	3.24	2.97	2.60	2.90	3.17	2.61	2.54	2.66	2.48	2.20	年中:男児>女児, 年長:関わり>要求への応答、援助 男:要求;年中>年長, 年長:関わり>要求への応答、援助
	<i>SD</i>	(1.32)	(1.32)	(1.33)	(1.20)	(1.23)	(1.03)	(1.24)	(1.27)	(1.41)	(1.12)	(1.19)	(1.03)	

引っ込み思案例話ごとに、登場人物のような行動を示す友達がいると答えた群といないと答えた群の、受容度の差について t 検定を行なった。Table 4 に結果を示した。

会話場面の反応ありおよび躊躇、あいさつ場面の躊躇、援助場面の反応ありに対する受容度において、友達あり群の方がなし群よりも受容度が高かった ( $t(88)=2.55; 2.97; 2.93; 3.42, p < .01$ , 両側検定)。

Table 4 引っ込み思案的友人の有無による仮想場面の引っ込み思案児への受容度の差

場面	反応種類	友達あり			友達なし			t
		n	平均	SD	n	平均	SD	
仲間入り	反応あり	57	4.63	0.82	33	4.58	0.87	0.31
	躊躇	19	4.00	1.33	71	3.62	1.25	1.16
	無反応	21	3.57	1.54	68	3.19	1.55	0.99
会話	反応あり	42	4.93	0.34	46	4.52	0.98	2.55 **
	躊躇	20	4.25	1.07	70	3.19	1.50	2.97 **
	無反応	16	3.00	1.46	74	2.86	1.56	0.32
あいさつ	反応あり	48	4.79	0.58	42	4.55	0.92	1.53
	躊躇	11	4.18	0.98	79	2.81	1.50	2.93 **
	無反応	13	2.54	1.56	76	2.75	1.58	0.45
要求への応答1	反応あり	30	4.27	1.14	60	4.05	1.24	0.80
	躊躇	22	3.36	1.62	68	3.31	1.44	0.43
	無反応	20	2.50	1.50	70	2.73	1.58	0.58
要求への応答2	反応あり	24	4.17	1.43	66	3.74	1.40	1.27
	躊躇	15	3.40	1.30	74	3.09	1.47	0.74
	無反応	29	2.55	1.43	61	3.00	1.56	1.31
援助1	反応あり	43	4.51	1.08	47	4.17	1.34	1.32
	躊躇	19	2.53	1.54	71	3.10	1.50	1.47
	無反応	23	2.30	1.36	67	2.99	1.57	1.85 +
援助2	反応あり	34	4.82	0.46	56	4.04	1.28	3.42 **
	躊躇	16	3.56	1.50	73	2.85	1.53	1.69 +
	無反応	13	2.46	1.71	77	2.53	1.51	0.15

## 考 察

場面と引っ込み思案反応の種類による受容度の差

本研究では、広義の引っ込み思案の行動のバリエーションとして、他者からの働きかけに対して受動的あるいは非言語的ではあっても何らかの反応を示す者、働きかけに対して躊躇する者、無反応な者をそれぞれ記述する例話を幼児に提示した。このうち、反応を示す者に対しては、躊躇や無反応な者に対するより幼児の受容度が高かった。どのような相互作用場面においても、また、どの年齢・性別でも、反応を示す者に対する受容度（5点満点）の平均はおおむね4点以上であり、「遊びたい相手」として評価されていた。一方、働きかけに対して躊躇する者と無反応な者に対する受容度の差は、相互作用の場面によって表れる場合と表

れない場合があった。遊びや会話で誘われたり話しかけられたりした時に躊躇（もじもじする）を示す者は、無反応（何も言わずに去る）な者よりも受け入れられた。しかし、同じような躊躇でも、他者からの要求に対する応答として示された場合、無反応と同程度に受容度が低いことが示唆された。

躊躇反応に対する年齢×性別×場面の分析結果からも、仲間入りやあいさつなどの日常的な関わりでの躊躇の方が、他者の困窮状況で示される躊躇よりも受け入れられていることが見出された。

Coplan et al. (2007) では、シャイな子どもの行動面の記述として「友達が遊んでいる時、その様子を見えています」、非社会的な子どもの行動面の記述として「他の子が遊んでいる時、ひとりで遊んでいます」として提示した。本研究で用いた躊躇反応の記述は前者に、無反応は後者に対応すると考えられる。そのようにとらえた場合、Coplan et al. (2007) で示されたシャイに比べて非社会性に対する幼児の受容度が低かった結果と、本研究の結果は一致するといえよう。ただし、Coplan et al. (2007) と異なり、本研究の架空のクラスメートの説明には、登場人物の感情や好みなどの内面情報は含まれていない。それにもかかわらず、幼児は行動情報だけに基づいて異なる評価を示した。他者からの働きかけに対し、明確な反応を返さない場合と何も言わずに去る場合とでは、言語コミュニケーションのレベルでは返事をしないという点で同じだが、非言語コミュニケーションのレベルでは異なるメッセージを相手に与えることになると思われる。躊躇反応と無反応に対する受容度が異なるという結果は、幼児がこのように非言語コミュニケーションのレベルでも他者の行動を評価していることを示唆している。

引っ込み思案への受容における年齢差と性差

いくつかの場面では年齢差も示され、年中の方が受容的であった。年齢が上がるほど引っ込み思案に対して拒否的になるという結果は、児童を対象にした研究結果と一致する (Younger & Piccinin, 1989; 佐藤ら, 1989)。本研究の結果から、幼児期にすでにその傾向はみられるといえるだろう。

性差に関しては部分的に示され、男児が女児よりも引っ込み思案行動に対して受容的であった。会話場面・あいさつ場面・要求への応答場面において、引っ込み思案の種類によらず、また、場面によらず躊躇反応全般において、性差が示された。

また、性別と年齢を含めた二次の交互作用もみら

れ、年中男児は他の群が拒否する無反応さに対して、許容的な傾向があった。

男児の方が受容的という結果は、佐藤ら(1989)と一致している。しかし、男児の方が同性の引っ込み思案児に対して受容的であることは、引っ込み思案の社会的不適応に関する研究で示唆されている、男児の引っ込み思案の方が女児よりも不適応に陥りやすいという知見(Rubin & Coplan, 2004)とは矛盾するとと思われる。この点については、Coplan et al. (2007)が、性差が示されなかった自身の研究結果への考察として、同性の架空のクラスメートに対する認知しか検討しなかったことを挙げている。本研究も彼らと同じく、男児の男児に対する、そして女児の女児に対する評価しか検討していない。異性も含めた同年齢集団の中での、引っ込み思案的な男児と引っ込み思案的な女児の位置づけという点では、男児の方が不利という可能性があるだろう。

また、仲間からの受容が引っ込み思案児本人の適応感に影響するプロセスに、ジェンダーの影響が介在すると考えられる。Nelson, Rubin, & Fox (2005)は以下の結果を示している。7歳での自由遊び場面の傍観行動や何もしていない状態の多さが、男児においてのみ、幼児自身が知覚する仲間からの受容の低さと関連していた。一方で、男女ともにそれらの行動は、観察された仲間からの受容の低さと関連していた。これらの結果は上述の解釈を支持するといえよう。

#### 引っ込み思案児との関わりの有無による受容度の差

架空の引っ込み思案児と同じような行動を示す友達がいるかどうかという経験の違いによって、受容度に差があるかを検討したが、引っ込み思案反応のうち、何らかの反応を返す者と躊躇する者に対して、一部の場面についてのみ差が見出され、経験のある者の方が受容度が高かった。他者理解の発達に関する知見によれば、幼児期に、他者の行動と内的特性の関連づけ、内的特性からの行動予測などができるようになってくる(e.g., 清水, 2000)。引っ込み思案傾向のある仲間とのかかわりの中で、自ら話しかけたり遊びに誘ったりしない子どもでも遊び相手になりうるという経験をしたことで、引っ込み思案行動に対して拒否的ではない解釈や予測がなされ、高い受容度を示したのかもしれない。

本研究は、架空のクラスメートへの幼児の評価を調べたものであり、実際の相互作用における引っ込み思案行動への受容との解離の可能性は否定できない。そ

のような限界はある一方で、本研究で得られたいくつかの知見は、引っ込み思案傾向のある幼児の仲間関係への支援を考える際に、示唆を与えるものと思われる。

#### 文 献

- 千葉紀子・藤岡久美子(2009). 自由遊びにおける幼児の仲間との相互作用－相互作用の少ない子どもの行動および認知的特徴－ 山形大学教職・教育実践研究, 4, 51-60.
- Coplan, R. J., Girardi, A., Findlay, L. C., & Frohlick, S. L. (2007). Understanding solitude: Young children's attitudes and responses toward hypothetical socially withdrawn peers. *Social Development*, 16, 390-409.
- Giles, J. W., & Heyman, G. D. (2004). Conceptions of Aggression and Withdrawal in Early Childhood. *Infant and Child Development*, 13, 407-421.
- Goossens, F. A., Bokhorst, K., Bruinsma, C., & van Boxtel, H. W. (2002). Judgments of aggressive, withdrawn and prosocial behavior: perceived control, anger, pity and sympathy in young Dutch children. *Journal of School Psychology*, 40, 309-327.
- 林智幸(2004). 行動予測からとらえた幼児の性格特性概念の内容 教育心理学研究, 52, 52-60.
- Hymel, S. (1986). Interpretations of peer behavior: Affective bias in childhood and adolescence. *Child Development*, 57, 431-445.
- 片山美香(1991). 幼児の仲間の受け入れ行動に及ぼす個人特性の影響 日本発達心理学会第7回発表論文集, 47.
- 松永あけみ(2002). 幼児は他者の内的特性をどのようにとらえるのか 発達心理学研究, 13, 168-177.
- Nelson, L. J., Rubin, K. H., & Fox, N. A. (2005). Social withdrawal, observed peer acceptance, and the development of self-perceptions in children ages 4 to 7 years. *Early Childhood Research Quarterly*, 20, 185-200.
- Pekarik, E. G., Prinz, R. J., Liebert, D. E., Weintraub, S., & Neale, J. M. (1976). The Pupil Evaluation Inventory: A sociometric technique for assessing children's social behavior. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 4, 83-97.
- Rubin, K. H., Chen, X., & Hymel, S. (1993).

Socioemotional Characteristics of Withdrawn and Aggressive Children. *Merrill-Palmer Quarterly*, 39, 518-534.

Rubin, K. H., & Coplan, R. J. (2004). Paying attention to and not neglecting social withdrawal and social isolation. *Merrill-Palmer Quarterly*, 50, 506-534.

佐藤正二・佐藤容子・相川充・高山巖 (1990). 極端な引っ込み思案児の社会的適応と社会的スキル 宮崎大学教育学部紀要, 68, 1-8.

佐藤正二・佐藤容子・高山巖 (1989). 引っ込み思案行動の評定における発達的变化 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 128.

東山薫 (2007). “心の理論”の多面性の発達－Wellman & Liu尺度と誤答の分析－ 教育心理学研究, 55, 359-369.

清水由紀 (2000). 幼児における特性推論の発達：特性・動機・行動の因果関係の理解 教育心理学研究, 48, 255-266.

Younger, A., & Daniels, T. (1992). Children's reasons for nominating their peers as withdrawn: Pssive withdrawal versus active isolation. *Develop-mental Psychology*, 28, 955-960.

Younger, A. J., & Piccinin, A. M. (1989). Children's recall of aggressive and withdrawn behaviors : Recognition memory and likability judgments. *Child Development*, 60, 580-590.